



日本ルイ・アームストロング協会 記念特集号 ワンダフルワールド通信 No.84

日本ルイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF) 2015年3月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫 / ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>

皆さまのおかげで発足20周年を迎えました

日本ルイ・アームストロング協会

WJF 20th

周年記念

いろいろあった「あの日、あの時」を振り返って——外山喜雄・恵子

WJFでは7月12日(日)、上野・精養軒で記念パーティー開催も予定しています

多くの皆様の応援をいただき、日本ルイ・アームストロング協会(ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF)は昨年7月、発足20周年を迎えることができました。皆様への心からの感謝をこめ昨2014年7月にお礼の気持ちを伝えようと思っていたのですが、その時期、ユネスコ・インターナショナル・ジャズデイへの参加やニューオリンズから来日のドラマー、シャノン・パウエル・バンドとの民音ツアー、瀬川昌久先生のルイ・アームストロング特集コンサート、毎年恒例ジャズツアーとニューオリンズ・ジャズ博物館への1万ドル寄付金贈呈…等々光栄なイベントが次々と重なりました。遅くなりましたが、年が明けた2015年、新年最初の会報で私たちからの感謝の気持ちをお伝えさせていただきます。



①1994年7月6日の設立記念パーティーで歌う水森亜土さん(手前左)とドリー・ベーカーさん ②同8月22日、ジョン・ブルーニースとニューオリンズ・ジャズ・オールスターズを迎えての第1回例会＝渋谷ボスで ③WJF発足前にスタート、名物となった「サッチモ祭」＝1982年8月8日、大丸東京店で ④東日本大震災直後の2011年4月24日、外山夫妻は気仙沼を訪れ、楽器を寄贈した子供たちと共に被災者のみなさんを激励 ⑤「今度は私たちが恩返しする番」…ニューオリンズからから高校生らヤングバンドが被災地を回り、サッチモ祭でも熱演した＝2012年10月14日、エビスビール記念館で ⑥夢がかなって「スウィング・ドルフィンズ」が渡米、ニューオリンズのサッチモ・サマーフェストに出演した＝2013年8月3日

会員の皆様、理事・スタッフ、ジャズファン、デキシーセインツのメンバー、ジャズの仲間たち、企業、団体…

本当に皆さまの熱い応援に元気をいただいた20年と実感

会報全号をまとめた“豪華本”を手元に改めて振り返るWJFの歴史

先日、WJF理事で元産経新聞記者の小泉良夫さんご夫妻から、20年の記念にと私たちの手元に素敵なプレゼントが届きました。1994年7月、WJF発足時のワンダフルワールド通信第1号から昨年12月発行の83号まで。これを全てまとめて立派なハードカバー本3冊に製本し、目次も作って下さって、要所要所にカラー写真をちりばめ、背表紙には金文字で“ワンダフルワールド通信”。日本ルイ・アームストロング協会の活動20年の記念として、この上ない貴重なプレゼントを贈って頂き、感謝しているところです。

20年の活動が詰まった3冊のプレゼント“豪華本”の形で本を手にとってページをめくると、自分たちもびっくりするような様々な活動や夢が実現したことを改めて思い出させてくれます。会員の皆様をはじめ、理事・スタッフ、ご協力して下さる多くのジャズファン、デキシーセインツの素晴らしいメンバーとジャズの仲間たち、企業、団体他…本当に皆様に支えていただき、背中を押していただき、長年の熱い応援に元気をいただいた20年だったと実感しています。

発足から20年…会員は延べ600人近くに

WJF事務局の細川ハテミさんと外山恵子が、現在の会員

の皆様の在籍年数の集計をまとめました。なんと！現在会員242名様中、発足以来20年の長い期間会員でいて下さっている方々が60人もいらっしゃいます。同じく15～19年53人、10～14年49人、5～9年2人、0～4年38人…という、驚きの結果が出ました。そのほかにも、高齢やご逝去等の諸事情による退会の皆様330人も考えま

すと、600人近い皆様がこの活動に会員としてご参加いただいたわけです。ご賛同ご協力をいただいた皆様も考えますと、さらに多くの方々となります

…ルイ・アームストロングの音楽や映像等を楽しみ、ジャズのふるさとニューオリンズとアメリカへの恩返しの楽器を贈り、その結果実現した日米の子供たちのジャズ交流と、日米のジャズファンの心の交流…。そんな、サッチモのワンダフルワールドの世界を少しでも実現させていただいたことを、皆様と共に喜ばせて頂きたいと思います。

楽器贈呈や例会など広がった初期の10年

改めて20年の活動を振り返って見ますと、日本ルイ・アームストロング協会の最初の10年は、サッチモの孫たちに楽器を贈る“銃に代えて楽器を”の広がり、そして、数々の企画、例会、コンサートが実現した10年でした。



東京九段ライオンズクラブからの寄贈でXmasプレゼントとして始めてニューオリンズの子供たちに贈られた楽器たち＝1995年12月(次ページに記事)

WJFは、ルイ・アームストロングを愛する皆様が集っていた会ですが、“サッチモファンクラブ”だけではなく、それにプラスした何か象徴的な活動はないだろうか。その頃、銃の氾濫に悩むアメリカ、しかもニューオリンズのすぐ隣町ともいえるバトンルーージュで、留学生の服部剛丈さんが誤って射殺された

事件があり、ニューオリンズの子供たちも麻薬や銃に囲まれて暮らしている…できれば銃社会アメリカに、銃を発砲して少年院に收容されトランペットと出会って、偉大な一生を送った

サッチモの生涯を思い出してもらいたい。ジャズ修行でお世話になったニューオリンズへの恩返しに、ニューオリンズの子供たちに楽器を贈って、第2第3のサッチモが生まれてくれれば…。そして、戦後アメリカにお世話になり、また、ジャズというアメリカが世界にくれた最高のプレゼントへの日本のジャズファンからの恩返しの気持ちになればと、発足と同時に、“銃に代えて楽器を”の合言葉で“サッチモの孫たち”に楽器を贈る活動がスタートしました。

新聞記事が次々と波紋を広げ活動の輪が…

発足後まもなく、最初にこの会の発足と“銃に代えて楽器を”を報道して下さった読売新聞の阪口忠義記者。この記事をきっかけに、亡くなられた弟さんの楽器や、思い出の叔父様の楽器、ジョージ・ルイスとサッチモが好きで、二人の息子さんに譲二(ジョージ)、幸茂(ゆきしげ＝サチモ)と名付けた亡きご主人の楽器を贈って下さった方…。色々なジャズへの



お茶の水アテネフランセでの例会も人気を呼んだ＝1999年

思いのこもった楽器が寄せられ、ニューオリンズの“サッチモの孫たち”の元へ旅立っていきました。

東京九段ライオンズクラブは、ニューオリンズ・スタイルのジャズベースを弾かれた故室橋幸三郎さんが、この記事をご覧になって感激され、ライオンズクラブ発足30周年記念として、100万円のご寄附をくださいました。この100万円で、東京・

新宿区の楽器輸入会社(株)グローバルの福田忠道社長(当時=現会長)から、破格の条件でトランペット、サクソ、トロンボーン等34本をご提供いただき、ニューオリンズに贈ることができたのです。この橋渡ししてくださったのが、私たちジャズファンの中で人気者だったロクさんこと、故鶴沢緑郎さんでした。この

ニュースは12月24日、毎日新聞夕刊の社会面トップニュースになりました！そしてその後、夕刊フジの連載や英字新聞の記事、朝日新聞、日本経済新聞等多くの新聞がこの活動を取り上げてくださり、活動が徐々に知られるようになっていったのです。

サッチモ祭、サッチモの旅、TDL出演など続く

同時に、夏恒例のサッチモ祭開催、1992年に始まった毎年のニューオリンズ・ジャズツアー「サッチモの旅」(最初はロス・ジャズ祭からニューオリンズ、その後、ニューオリンズからNY)も続きました。また、同時に東京

ディズニーランドでの週5日の仕事を通して、サッチモと並ぶアメリカが生んだ巨人、ウォルト・ディズニーの世界を学びハートに触れたことも大変嬉しく有難い体験でした。来日するディズニーランドのアメリカ人スタッフやの出演者を通じて、アメリカン・ショービジネスの世界に触れ、子供から大人まで観客の笑顔に23年間接したことは、エンターテインメントであるジャズを違った角度から見つめ、また“サッチモの世界”をより深く理解するきっかけをいただいたと思っています。

例会では、故人となられた偉大なジャズ評論家、油井正一さん(写真中央の上段左)、池上悌三さん(同右)、いソノてルヲさん(同下段)や、水道橋SWINGのマスター柴田栄一さん。その他、現在もご夫妻で会を支えて下さっている中村宏さん、

和田誠さん、与田輝雄さん、みなみらんぼうさんら多彩なトークゲスト…そして数多くのジャズ映画に登場する希少なサッチモ映像の上映。例会のライブには、浅草女将さん会の富永照子さんが招いたジョン・ブルーニース・ニューオリンズ・オールスターズ、スウィーディッシュ・ジャズキングスを始め、サー・チャールス・トンプソン(p)、ジミー・スミス(ds)、ドリー・ベイ

カー(vo)、元ファイヤハウス+2 のジョージ・プロバート(ss)、ボブ・グリーン(p)、ブッチ・トンプソン(p)とジェリーロール・モートンの世界、デキシーキングス、ニューオリンズ・ラスカルズ、原朋直…等々。サー・チャールスさんと奥様が参加され、例会の後、会員の皆様と一献傾けながらの打ち上げ

会も、楽しい思い出です。御茶ノ水アテネフランセという、アカデミックな会場を使わせていただき開催した例会の回数は、最初の10年間で35回にも上りました。

シリーズ例会として開催した、「サッチモ・ワンダフル・オン・フィルム」の映像特集5回シリーズ、「サッチモ生誕100年とジャズの巨人達」(5回)は、ウイントン・マルサリスとリンカーン・

センターが、サッチモ生誕100年にあたる2000～2001年に企画したコンサートに触発されたシリーズ企画でした。そして、「サッチモ生誕100

年、ジャズ創世期への旅」5回シリーズ企画は、総集編をヤマハホールで開催、平成13年度芸術祭参加ともなりました！

サッチモハウス博物館会館に1万ドル！

1996年、世界的なジョン・コルトレーン研究家として知られる大阪の藤岡靖洋さんから、サッチモがNYで暮らした家を博物館として開館する支援を日本からできないだろうか、と

いうご依頼をいただき、私たちのファン名簿で呼びかけをさせていただいたところ、なんと1ヵ月で100万円を皆様からお寄せいただき、当時夕刊フジ報道部だった小泉さんご夫妻と共に、NYサ

ッチモハウスに1万ドルをお届けした(写真)、サッチモの楽器を吹かせていただき、サッチモのお墓に初めてお参りしたの



ディズニーランドでの外山さんらロイヤル・ストリート・シックス=撮影年不明



も懐かしい思い出であるとともに、その後のWJFの発展に大きな影響を与えた画期的な出来事だったと思います。サッチモの楽器とは、1964年、サッチモ来日の際、私が楽屋に忍び込んで吹かせてもらって以来の“感激の再会”でした。

サッチモ生誕100年、“運命のいたずら”が…

2001年のサッチモ生誕100年の年を迎え、日本でもアメリカと歩調を合わせたシリーズ・コンサートを企画、皆様に楽しんでいただきました。WJFのスタートが、サッチモの生誕100年の時期と重なったことも、嬉しい“運命のいたずら”だった様な気がします。収集していた16mmフィルムの映像が役に立ち、演奏との組み合わせによるジャズとサッチモの歴史を、皆様の応援に支えられて

実現できたわけです。こうした企画は振り返れば、本場アメリカに出しても誇れるシリーズ企画となっていたと思います。

生誕100年の2001年、ニューオリンズ市議会はニューオリンズ国際空港をルイ・アームストロング・ニューオリンズ国際空港と改名することを決議、同年にはサッチモを讃えるジャズ祭サッチモ・サマーフェストも第1回目がスタートしました。3回目のフェスティバルでは、私たち外山喜雄とデキシーセントに光栄にも招待状が届き、以来13年間連続出演させていただき、嬉しいことに人気グループともなっているのも、運命的な縁を感じています。

ペリカン便がペリカン州への楽器輸送を続ける

銃に代えて楽器をでは、各方面から嬉しいご協力をいただきました。前述したグローバルの福田忠道さんが楽器のご提供に便宜を図って下さるとともに、同社のグローバル管楽器技術学院の生徒さん(OBまで！)が現在も贈呈された中古楽器を無償で修理



福田さん始め学院生のみなさんと=2007年10月

して下さっている。また、会員の森忠彦さんは、ご関係のあった日本通運株式会社をご紹介下さり、ニューオリンズへ贈られる楽器の輸送を日通ペリカン便が担当、嬉しいことに1998年以来現在までペリカン州(ルイジアナ州の愛称)への配送のご協力を続けていただいています！

こうした楽器の送り先ニューオリンズの高校でバンド指導を担当する熱血バンド指導者、ウィルバート・ローリンズ先生との出会い、そして、現地ニューオリンズの「タイムズ・ペキュン」紙の女性記者で人気コラムニストでもあるシーラ・ストラウプさんとの出会いもありました。「欲望という名の電車」の行く

先で有名な欲望通り(デザイナー・ストリート)の低所得者ハウジングに住む、もっとも貧しいスラムの子供たちを教えていたローリンズ先生…靴下も買えない子供がいる、でも、そういう子がいい音楽をやるんだ！先生は、危険な環境に暮らす子供たちを指導する経験から、私たちの“銃に代えて楽器を”のスローガンとサッチモの人生に心から共感

を覚えたのです。シーラ・ストラウプさんも、この活動を現地で何度もレポートし続けてくれた最高の理解者です。このお2人とは、現在も長く深い、温かい縁が続いています。

ニューオリンズ歴代総領事も注目しご協力

毎年ジャズツアーでニューオリンズを訪れ、楽器を子供たちに贈呈するグループ…これをニューオリンズ総領事館の石川正紀総領事と文化担当の副領事、永瀬沙織さん(いずれも2003年当時)が見て下さっていました。2005年には、総領事館からのご推薦によってこの活動が外務大臣表彰を受け、当時の坂戸勝・新総領事のご厚意で、ニューオリンズ総領事公邸でツアーの時期に合わせた授賞記念パーティーを

開催して頂くという名誉な出来事もありました(写真上)。しかも、パーティーには、ツアー参加の皆様、楽器を贈呈している学校や市役所、ジャズ祭関係者等ニューオリンズのミュージシャンや友人、関係者、そして伝説的レコードプロデューサー、ジョージ・アバキアンさん、サッチモハウス館長マイケル・コグスウェルさんまで出席して下さった。しかし、このパーティーの25日後、ニューオリンズを突然襲った巨大ハリケーン・カ

トリーナで、街は壊滅的な被害を被ってしまったのです。

目を覆うようなジャズの故郷のハリケーン惨状

目を疑うような、思いもしなかったジャズの故郷の惨状に、日本中の多くのジャズファンが息をのみました。サッチモ祭を開催させていただいていたサッポロビールのエビスビール記念館でニューオリンズ支援コンサートを開催させていただけな

いだろうかという電話に快諾のお返事をくださったのが、当時のサッポロビール、岩間辰志社長でした。こうして、10月10日、日本で最初となったニューオリンズ支援のコンサート、緊急サッチモ祭が開催されました(写真右)。詰めかけていただいた皆さんの熱いニューオリンズへの想い、今でも胸が熱くなります。その日一日で寄せられた寄付金が150万円を超え、N



HK、フジテレビ、新聞各紙等メディアでも大きく報道されました。その後、ニューオリンズのミュージシャンに直接届けてくださいと、全国のジャズファン、アマチュアバンドの皆さんからも義援金が寄せられ、1000万円を超える額を被害にあったミュージシャンに届けることができたのです。

“銃に代えて楽器を”で育っていた日米交流が、ニューオリンズを救おう、という日本中のジャズファンからの支援の気持ちと共に、大きく盛り上がった瞬間でした。

東日本を襲った大震災に“恩返し”の支援

この緊急サッチモ祭から日本ルイ・アームストロング協会の次の10年が始まったと思います。ニューオリンズの皆さんが、日本の人々からの支援に心から感謝し、街が復興に向い、ジャズの通りにスウィングが戻ってき始めた2011年3月11日、今度は、日本が、あの東日本大震災という思いもかけない大災害に見舞われました。“ニューオリンズの被災がミニ災害に感じられる”と、ニューオリンズの新聞記者シーラ・ストラウブさんは書きました。今度は、ニューオリンズが日本に恩返しする番…そんな報道もあって、ニューオリンズの人々が立ち上がってくれたのは、本当に思いがけない嬉しい出来事でした。こうしたジャズの故郷の人々の日本への気持ちが表れたのが、「津波で楽器をなくした子供たちが居たら楽器を寄付したい。日本がニューオリンズにしてくれたことを、今度は私たちがお返ししたい」と言って送られてきた、ティピティナス財団からの楽器購入資金でした。

仙台でジャズバー、ジャズミーブルースNOLAを経営する佐々木孝夫さんは、ニューオリンズの音楽が大好きで、ハリケーンで被災したニューオリンズを支援したいと、知人から譲られたニューオリンズの黒人人形セットを定禅寺ストリートジャズ・フェスティバルで販売し、日本ルイ・アームストロング協会名義で90万円を超える義援金を現地へ送って下さっていま

した。ニューオリンズから「津波で楽器をなくした子供たちが居たら支援したい」と連絡を受けて佐々木さんにご相談したところ、気仙沼の小中学校の子供たちのジャズバンド、須藤丈市さんの指導される「スウィング・ドルフィンズ」のことが分かったので

です。佐々木さんのお話では、スウィング・ドルフィンズが震災の6週間後の4月24日、避難所となっていた気仙沼総合体育館前で開かれる、定禅寺ジャズ主催の被災者支援コンサートに出演したがっているが、子供たちの楽器など、何もかも津波で流されて皆無という。そんな経過で、ニューオリンズ—浦安—仙台的心のリレーが始まった。大震災からわずか1か月半で、子供たちの笑顔とジャズが復活したのです(写真下)。ここでも、WJF発足時、お力をくださったグローバルの福田忠道さんが、



ニューオリンズから送られてきた寄付金で、破格の値段で楽器をご提供くださり、入金前に発送することなど素早い支援の手をさしのべることが出来たのです。私

が子供時代を過ごしたナベサダ(渡辺貞夫)さん(sax,fl)のふるさと宇都宮市の“ジャズのまち委員会”会長、吉原郷之典さんも、宇都宮ジュニアジャズオーケストラのドラムセット一式を仙台まで届けてくださいました。

“銃に代えて楽器を”に大転換をもたらした人たち

1994年のWJF発足から5年間ほどは、“銃に代えて楽器を”の運動はニューオリンズではほとんど誰にも知られない小さな活動でした。そんな折、変化のきっかけを与えてくれたのが、当時ニューオリンズ在住の美貴ローボックさんでした。ローボック先生、記者シーラさんとのつながりが出来て、活動が大きく広がったのも、この優秀なツアー・コンダクターの美貴さんでした。美貴さんには心から感謝しています。その美貴さん自身も2005年のハリケーンで被災され、シカゴの日本商工会議所に転職されていました。シカゴの美貴さんに、気仙沼の子供達ニューオリンズの支援で復活のニュースをお伝えしたところ、知人の時事通信社シカゴ支局勤務の松岡謙三記者niこのニュースga伝わり、シカゴ発で全世界に配信して

くれたのがきっかけで、大きなニュースとして報道されることになったのです。

日米の子供たちを合わせてあげたい…夢は膨らむ

この日、気仙沼のコンサートには、私達夫婦、小泉さん、セインツのベース奏者、藤崎羊一さんの4人が2日ばかりで車を駆って出向いたのです。無数のテレビカメラ、新聞記者の皆さんに囲まれたドルフィンズの復活を熱い眼で見つめていたときでした。楽器を贈り、贈られた日米の子供たちを、いつか合わせてあげることができないだろうか…そんな気持ちになり、私たち夫婦の、まさに“あり得ないような夢”となって膨らんでいきました。そのあり得ない夢が、その後、数年で本当に実現する…そんなことが起こったのです。

ドルフィンズの復活を喜んでくれたジャパントイムズのケン川島記者は、以前から私たちの“銃に代えて楽器を”の活動を、朝日イブニングやジャパントイムズ等の英字新聞で取り上げてくれていました。大震災から1年にたった2012年3月8日、川島記者は、ジャパントイムズの全ページ大の記事で、『津波で離ればなれに、そして、ジャズで結ばれる』(Torn apart by Tsunami, Bound by Jazz) という英文記事を掲載して下さり、この記事をニューオリンズのティピティナス財団に送ったところ、オーナーのローラード・フォン・カーナトウスキー氏が感激、『日米でともに大災害を体験した子供たちのジャズ交流』の話が進み始めました！ でも、費用の面で負担が大きく、元ニューオリンズ総領事の坂戸勝さんにご相談したりする中、アメリカ大使館の八巻理恵さんを通じてアメリカ大使館の交流プログラム『TOMODACHIイニシアティブ』、国際交流基金の諏佐由有子さん、松本健志さんを通じて国際交流基金のご支援を受ける道をつないでいただくことができました。

アメリカ大使館のご支援には、もう一つの不思議な縁がありました。ニューオリンズから送られた楽器で気仙沼の子供達、スウィング・ドルフィンズがカムバックしたニュースは、日本中

が大災害の悲しみに沈む中、明るい心温まるニュースとして報道されました。このニュースに感激したルース・アメリカ大使(当時)がツイッターで取り上げてくださり、その後の進展の隠れた力となって下さったのです。2012年9月には、外国人特派員の投票により推薦され、日米のジャズ交流に尽くした活動に対して、国家戦略大臣から感謝状を夫婦で頂くという光栄な経験までもさせていただきました。

被災地若者による日米ジャズの交流スタート

2012年10月、楽器を贈ってくれたティピティナス財団の



ジャズプログラムの選抜8人の若手ジャズバンドと、私たちが長年支援してきたウィルバート・ローリンズ先生の率いる高校生オー・ペリー・ウォーカー高校のチョーゼンワズ・ブラスバンド8人が先生方や指導者ともども成田に到着し、東北の被災地を慰問、楽器を贈られた子供たち

との交流が実現しました(写真上)。ティピティナス財団、日本ルイ・アームストロング協会、国際交流基金、そして仙台の佐々木孝夫さんの「みやぎ音楽支援ネットワーク」の協力で



夢叶って「スウィング・ドルフィンズ」がサッチモ・サマーフェストで熱演！ 踊り出す若者も＝2013年8月4日

実現したジャズの故郷からの使節団来日には、ニューオリンズのテレビニュースショー人気キャスター、エリック・ポールセンさんも同行取材、このジャズ親善使節の30分ドキュメンタリー『悲劇から勝利へ』(From Tragedy to Triumph)は、現在も繰り返しニューオリンズで放送されています。

ニューオリンズの子供たち来日の奇跡に続き、もう一つの奇跡も実現しました。2013年8月には、スウィング・ドルフィンズの夢のニューオリンズ訪問が、国際交流基金、アメリカ大使館 TOMODACHI イニシアティブ、日本ルイ・アームストロング協会、ティピティナス財団の協力で実現したのです。ちょうどサッチモ・サマーフェスト開催中、津波から復活した子供たちの復活のジャズは、フェスティバルでも大人気、子供たち、指導者の須藤丈市さん、同行のスタッフ、皆さんにジャズとサッチモの故郷での最高の時を体験して頂くことができました。そして日本ルイ・アームストロング協会のジャズツアーご参加の皆さんも私たちも、大震

災をしばし忘れてスウィングする子供たちとニューオリンズの人々の笑顔に接し、忘れえない時を過ごすことができたのです。

信じられない悲惨な事件や感動的なシーンも

20年の間には、楽器をあげた少年が銃で射殺される悲しい事件も起こりました。また、2012年に来日したトロンペッターは、殺人の容疑に巻き込まれ、もう2年近く未決囚として少年刑務所に収監されています。でも、2001年、中学生の時に楽器をあげたトロンボーン・ショーティー(写真右)は今や大スター、オバマ大統領に招かれホワイトハウスで、ミック・ジャガー、BBキング他のスターたちと共演も果たしました(写真下=中央のトロンボーン奏者)。今、彼はニューオリンズの子供たちをジャズで育てようと、音楽教育のファウンデーションをスタートさせました。その他にも音楽で子供たちを育てようという音楽教育団体も、多数出来てきています。皆様に応援していただき実現した“銃に代えて楽器を”の運動、そして“日米のジャズ交流の暖かい話題”が、ニューオリンズの人々の心になにかを芽生えさせているのかも知れません。



皆様に応援していただき実現した“銃に代えて楽器を”の運動、そして“日米のジャズ交流の暖かい話題”が、ニューオリンズの人々の心になにかを芽生えさせているのかも知れません。

ジャズの不思議な縁に結ばれて集った方々

皆様、そして私たち、その他多くの方々のジャズへの憧れや夢、青春の思い出やジャズへの感謝のお気持ちの一つに、大きな輪にまとまった気持ちがいたします。こうした不思議な縁に結ばれて、次々と実現した夢



…これはまさに、天国のサッチモのいたずらの様で、ニューオリンズの夏空で笑っているサッチモの笑顔を見たような気がしています。

日本ルイ・アームストロング協会の発足は1994年ですが、その20数年前、私たちのニューオリンズ・ジャズ修行時代にそのスタートはあると思います。早稲田大学ニューオリンズジャズクラブの後輩で現WJF理事ワンダフルワールド通信編集長の山口義憲さんが、広告代理店に入社直後のNY研修

の途中ニューオリンズを訪問、私たちのアパートに居候していったのです！ 20年後、ディズニーランド出演で私たちが浦安に住むと、彼も浦安。地元のとんかつやさんでジャズへの夢を語っていたのが、この会の始まりとなりました。ニューオリンズに本部があったルイ・アームストロング・ファウンデーション日本支部を引き受けないか、というお話があった時、山口さんに相談、その時ご提案いただいた基本的な方針が現在に至るまで、すべて一貫して生かされています。

活動の記録にもなるからという事で、会報の発行も強く進めていただいたのも山口さん。30号まで、当時のワープロを使った編集と原稿作成を担当してくれました。

WJF理事の小泉さんは、夕刊フジからリフレッシュ休暇としての時間をもらったことから、ジャズがお好きだったためニューオリンズをゆっくり訪問、お帰りになると偶然、私が「早稲田学報」に記事を書いていて、ご連絡をくださいました。この時、夕刊フジに『今蘇るサッチモ』という連載コラムを掲載して頂き、これがご縁で理事をお願いすることとなりました。ニューオリンズに楽器をプレゼントする活動等何度も夕刊フジ紙上で同行取材、1996年のサッチモハウスへの寄付贈呈以来ジャズツアーにもご夫妻で何度もご参加、会報ワンダフルワールド通信51号からは、素晴らしい筆で記事をまとめて下さり、会報作成を引き受けてくださっています。

当時夕刊フジの掲載された連載記事をご覧になって小泉さんを訪ねられたのが、同じ理事の奥村清文さん。大学時代はジャズ研でコルネットを吹いて、サッチモの大ファン。積水化学工業㈱で部長を務められたご経験から、いつもの射たリーダーシップで理事会の進行等に力を発揮していただいています。会の方針決定時に欠くことのできない人材として、日本ルイ・アームストロング協会を支えていただき、また奥様にもボランティア・スタッフとして大変お世話になっています。様々なグッズ等にも精通されている奥村さんには、バッジやステッカーなど、WJFグッズの考案等にも大きく寄与していただいています。

事務局を一手に引き受けてくださっている細川ハテミさんとも不思議なご縁。同じ浦安在住で、東京ディズニーランド商品部に勤めておられた。私たちと同じ職場の間柄。年齢的にアナログ人間の方が多い世代なのに、パソコンの達人！名簿等の管理、セインツニュースやホームページの作成等々、一切を引き受けこの上ない力となっております。また、クリスマスパーティー、サッチモ祭その他イベントの受付など、スタッフとして細川さんなしでは成り立たない、そのような重要助っ人です。(9面に続く)

日本ルイ・アームストロング協会20周年を振り返ってみれば…
カーペンターズの名曲そのもの！「オンリー・イエスタデイ」
いま心に思い浮かぶ事柄——ワンダフルワールド通信編集長、山口義憲

レイ・ブラッドベリーの小説「たんぼのお酒」の中で、廃線となるトロリー電車の運転手が、11歳のダグラス少年に、20年前にトロリー電車が初めて町を走った時の話をするのだけれど、少年にとって20年前は遙か古代に思える、という描写がありました。

けれど私、山口68歳には、20年前は“オンリー・イエスタデイ”（カーペンターズの名曲）なのです。

協会の設立時から、会報の編集を中心に外山夫妻のお手伝いをさせていただきました。会報の編集にあたっては、①伝える：例会やイベントに参加できなかった会員の方々に、その模様を伝える ②残す：いつ、誰が、どこで、どんな曲を…という5W1Hを記録として残そう のふたつを心がけて会報の作成に取り組んでおりました。

20年間のWJFの活動と会報の編集を通して、今、心に思い浮かぶ事柄のいくつかを記してみます。

事柄その1：ボブ・グリーンと女子学生の心温まる交流

この件に関する記事（会報No. 50；2007年1月発行）を以下に再録します。

温かいピアノに笑顔が和む

第39回 特別ミニ例会「ボブ・グリーンを迎えて」

特別ミニ例会「ボブ・グリーンを迎えて」は11月6日（月）午後7時より浦安ハブで開催された。急な開催決定で参加者数が危惧されたが、40数名の会員やジャズファンが集い、顔なじみのみなさんの挨拶もそこかしこで交わされ、フレンドリーな雰囲気の中、ビデオによる映画の上映が始まった。外山会長の解説は「この映画は1978年、ルイ・マル監督の『プリティ・ベイビー』で、ブルック・シールズが子役で娼婦の役を演じています。この映画の音楽を担当したのが、本日のゲスト、ボブ・グリーンさんです。ボブさんは1925年生まれの81歳、アメリカの古き良き時代のピアノスタイルには定評があります。映画のエンディング、別れのシーンのピアノはボブさんの演奏です」と続く中、ボブさんがステージに登場、ピアノの前に座ると映画と同じ演奏（曲目 Mamie's Blues）をライブで始めた。なんとも心憎い演出。

1曲目は「フロギー・ムーア」 サイドには外山喜雄(tp)、鈴木孝二(cl)、外山恵子(bj)、藤崎羊一(b)のデキシー・セインツのピックアップメンバーという陣容だ。

ジェリー・ロール・モートンの曲から「ワイニング・ボーイ・ブ

ルース」、「バディ・ボールデン・ブルース」、トランペットとピアノのデュオで「キング・ポーター・ストンプ」。

“ブルースをやるうよ、キーは何？ Bフラット”といった会話から始まったのがやはりジェリー・ロール・モートンの「チャイムス・ブルース」、そして第1部最後の曲「タイガー・ラグ」はフランスのカドリール風スタイルから、虎の吼声のヒジ打ち表現にいたるまで、ジャズの系統発生を目の前で展開するという、同席の会員平井昌美さんが「米国会図書館秘蔵コレクションの再現だっ！」と感涙にむせぶプレイだった。

休憩をはさんで第2部は、ファッツ・ワーラー、アール・ハインズ研究のピアノニスト、クリスさんが飛び入りで登場。ファッツ・ワーラーから「浮気はやめた」、「ハニー・サックル・ローズ」、「ジターバグ・ワルツ」、アール・ハインズとレイのデュオの「ウェザー・バード・ラグ」は純文学的ジャズとでもいう高尚な演奏だった。

ボブ・グリーンさんが再度登場し「ミスター・ジェリー・ロール」、「ウォルバリン・ブルース」そして「メモリーズ・オブ・ユー」をしみじみと演奏すると、客席はほのぼのとした気持ちのよい雰囲気に包まれた。続いてボブさんは、ニューオーリンズの教会音楽「ジャスト・ア・クローザー・ウォーク・ウィズ・ズィー」を弾き始め、「ジャスト・ア・リトル・ホワイ・ト・ステイ・ヒア」になると客席にいた早稲田大学ニューオーリンズ・ジャズ・クラブの女子学生がトロンボーンを持って立ち上がり、ステージに向かって楽器を演奏しながら歩き出した。彼女のスタイルはジム・ロビンソンばりのニューオーリンズ・トロンボーン・スタイル。ステージに上がった彼女を見て、ボブさんの目じりが下がってくしゃくしゃの笑顔、年回りで言えばひ孫くらいの子と一緒にプレイに客席も笑顔ニコニコ。同じく早大ニューオリのドラムの男子学生箕輪旭さん、デキシー・ジャイブのバンジョーの坂本誠さんも飛び入りで素晴らしいセッションとなった。

アンコール曲は「You tell me your dream」。

ステージ終了後もボブさんとの記念撮影が続き、気持ちが温かく満たされた特別ミニ例会だった（写真上）。（山）

**事柄その2：
水道橋SWINGトーク元マスター柴田栄一さん**

「トラッドジャズを支えて34年」

会報1995年11月発行 No. 7

大森山王のご自宅へ外山喜雄さんと一緒に伺い、インタビューをさせていただきました。

水道橋SWINGは外山さんご夫妻をはじめ、トラッドジャズ



好きには欠かすことのできない場所で、私も都電の定期券を買って早稲田から通いました。

作家の村上春樹さんがSWINGでアルバイトをしていた話など興味深いインタビューでした。

事柄その3: ジャズ評論家、いソノてルヲ氏

特別寄稿13回「ルイ・アームストロングの思い出」
会報1998年6月発行 No. 16

1963年、1964年のルイ・アームストロング来日公演の際にMCを務められたジャズ評論家いソノてルヲ氏には「ルイ・アームストロングの思い出」と題するエッセイを13回にわたって会報(No.2; 1994年12月発行~No.16; 1998年6月発行)に寄稿いただきました。

また、『ルイ・アームストロング・オールスターズの再現』例会では、いソノ氏がオールスターズ来日公演時に着用したタキシードで登場、当時の構成

で演奏メンバーの紹介を行い、来日公演の思い出を語っていただきました。



事柄その4: ジャズ評論家、油井正一氏

1995年3月3日(金)、東京お茶の水アテネフランセホールでの例会に、ジャズ評論家、油井正一氏に特別ゲストトークとして「私のジャズ体験」を語っていただきました。ジャズへの熱い想いのトークでした。

事柄その5: ジャズ評論家、池上梯三氏

会報No. 4(1995年4月発行)に「ルイ・アームストロングについての昔話」を寄稿いただき、続いて会報No. 5(1995年6月発行)にジャズ評論家池上梯三氏のデビュー作「ルイ・アームストロングの音楽とそのレコード」(昭和14年ヴァラエティ7月号)全文を再録しました。そして、1995年7月12日(水)アテネフランセホールでの例会に登場いただき、「84歳、ジャズ評論家池上梯三先生のトークショー」を実施、会報編集長の山口がインタビュアーを務めさせていただきました。

(7面から続く)

そして、もう一人の重要スタッフ、渡辺研介さん。お父様で会員の渡辺理明さんに連れられて、子供時代から大丸屋上のサッチモ祭に来場、学生時代にWJFに入会して下さり、一時唯一のWJF学生会員として在籍、ワンダフルワールド通信にニューオリンズ紀行やサッチモCD情報などの記事も寄稿。サッチモ祭、パーティー等は研介さん抜きでは動かないような、欠くべからざるスタッフなのです。ディズニールンド出演を通じて知り合った友永麻里子さんには、30~50号まで、会報編集を担当して頂いた。WJF例会、サッチモ祭等イベントを手伝っていただいているボランティア・スタッフの方々にも、心よりお礼を申し上げたいと思います。WJFの発足以前、1981年から長年続けてきたサッチモ祭は昨年34回を迎えました。サッポロビールとエビスビール記念館のスタッフの皆様、岩間辰志元社長、ご出席

事柄その6:

早稲田大学学生のジャズをテーマとした卒業論文

会報No. 18~No. 20(1998年2月発行~1999年5月発行)の3回にわたって、早稲田大学第一文学部英文学専修、阪口忠義氏の卒業論文「How “Jazz” was originated」を掲載しました。阪口氏は学生時代、早稲田大学ニューオリンズクラブに所属、外山夫妻や山口の後輩でもありました。

事柄その7: 芸術祭参加

「サッチモ生誕100年 ジャズ創世期の旅 総集編」

2001年10月25日(木)、文化庁主催の芸術祭に「サッチモ生誕100年 ジャズ創世期の旅 総集編」が参加、銀座ヤマハホールで実施されました。私も司会で参加させていただきました。芸術祭参加を告知する会報号外が2001年8月に発行され、総集編のステージの様子は会報 No.30(2002年3月発行)で、小泉さんのレポートにより詳報されました。

事柄その8: ハリケーン“カトリーナ”ニューオリンズ救援

2005年10月10日、ニューオリンズを襲ったハリケーン“カトリーナ”による被害に、「ジャズの故郷ニューオリンズを救おう!」と、エビスビール記念館銅釜広場で、緊急チャリティーコンサートを開催(写真上)、3500人の方々が来場、会場での義捐金180万円、その後のキャンペーンで1,000万円を越すニューオリンズ基金が、現地ニューオリンズに贈られました。

会報号外(2005年9月発行)、ニューオリンズ支援緊急チャリティーコンサートの様子は会報No. 44(2005年11月発行)に掲載されました。

20年間の活動を振り返ると、本当に様々な事柄があったのだなあ、との思いがつのります。ジャズ評論家の先生方、元SWINGのマスター、ボブ・グリーンさんなど、天国で聖者の行進のセカンドラインに連なっていられっしやるの方々のご協力もあって、WJF20周年を迎えられたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

いただいているバンドの皆さん、ご出席のファンの皆さん、大きな力をくれている早稲田のニューオリの若い人々…そして1981年スタートしたサッチモ祭と一緒に立ち上げた、当時大丸東京店ご勤務だった肥後崎英二さんも、サッチモで結ばれた素晴らしい仲間として忘れることができません。

こうして振り返ると、理事スタッフの皆様との出会いに始まり、会員の皆様とのご縁、素晴らしいバンドメンバーにも恵まれ、そして不思議なほど多くの夢の実現…すべてがサッチモを巡る不思議な“縁(えにし)”に導かれている気持ちがあります。天国でサッチモはこの様子を見ていてくれるのでしょうか! きっと見守ってくれているサッチモの笑顔と、皆様と共にハートで感じたい…そう思っています。

(外山喜雄・恵子)

「銃に代えて楽器を」 ——サッチモのハートで子どもたちに夢と希望を

日本ルイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファンデーション【WJF】)



スウィング・ドルフィンズ(2011年)

聴く人を包み込むように“What a Wonderful World”と歌い上げるしわがれ声——テレビコマーシャルでおなじみの曲「この素晴らしき世界」や「聖者の行進」で知られるジャズの王様「サッチモ」こと、ルイ・アームストロング。ジャズを愛するサッチモファンが集う「日本ルイ・アームストロング協会」は、発足以来20年にわたって、子どもたちが未来に希望と勇気を持つことを願って楽器を贈る「銃に代えて楽器を」運動を続けてきた。贈った楽器は800点以上。ジャズの故郷にも共感の輪が広がった。協会と運動を率いるジャズ演奏家の外山喜雄さん・恵子さん夫妻に、運動のきっかけや取り組みについて聞いた。

社会の矛盾を肌で感じた米国でのジャズ修業時代

学生時代に同じジャズクラブだった外山夫妻。来日したルイ・アームストロングの楽屋にもぐりこんでトランペットを吹かせてもらった夢のような体験も後押しし、1967年暮れ、新婚の2人は移民船「ぶらじる丸」に乗って、ジャズの聖地米国ニューオーリンズに5年間の武者修行に出かけた。

1ドル360円、海外渡航者も年間30万人の時代で、「宇宙に行くような気持ちでした」と恵子さんは振り返る。喜雄さんも「豊かな暮らしぶりに驚くとともに、見ず知らずの自分たちに優しいアメリカ人やニューオーリンズ独特のサザンホスピタリティに感銘を受けました」

サッチモの育った黒人社会というものを体験したくて渡米したので、夫妻は現地の生活にどっぷりつかり、ジャズという共通語ですぐに人々に溶け込んだ。そこで知ったもう一つの現実、ジャズという宝物を生み出した黒人たちが、社会の底辺で暮らす姿。豊かな社会の裏側に見えた社会の実態は、その後の外山夫妻の活動の原点となる。

楽器のプレゼントで“サッチモの孫たち”に夢と希望を

帰国後、プロミュージシャンとして徐々に活躍するようになり、日本がバブル景気に沸く頃には、気がつくと米国の人々が慎ましく見えた。ベトナム戦争を経て米社会は荒

み、ニューオーリンズの子どもたちの楽器がボロボロなのにも心が痛んだ。武者修行でお世話になったアメリカ、戦後の日本を明るくしたアメリカの音楽、日本が学んだ技術や商品、奨学生制度、何より20世紀最高の贈りもの「ジャズ」を生んだ国アメリカに、何かの形で恩返ししたいと思うようになった。



修業時代の外山喜雄さんと恵子さん(右)

1992年、ニューオーリンズの隣町バトンルージュで、「フリーズ(動くな)」という言葉が知らなかった日本人留学生が射殺される事件が起きた。ほどなく、ルイ・アームストロング・ファンデーションの日本支部(現WJF)を立ち上げた外山夫妻は、会の象徴的な活動として「銃に代えて楽器を」運動をスタートする。サッチモにも11歳で発砲事件を起こして少年

院に入った過去がある。しかしそこでトランペットに出会い、その後の人生が大きく変わった。WJFでは、銃や麻薬、貧困に苦しむニューオーリンズの「サッチモの孫」たちを支援しようと、家に眠る中古楽器の寄贈を呼びかけ始める。一つひとつに贈り主の大事な思い出が詰まっている楽器は、グローバル管楽器技術学院の学生がボランティアで修理し、日本通運株式会社の協力でニューオーリンズに届けてきた。最初は年間20~30点だったが、現地メディアに紹介され、日本でも記事になると徐々に知られ、寄贈は現在820点に達している。「蒔いた種が芽を出している!と驚きでした。お金を使って動かしたわけではなく、会員さん、楽器を贈っ

てくださる方々、修理や配送に協力してくれる企業さん、皆のハートだけで芽が出たんです」と恵子さん。現地にも運動は波及し、貧困の子どもたちに無償で音楽を教える団体が生まれたり、同じような「銃を楽器にかえて」運動も多数生まれました。「ジャズの故郷にもちょっと影響を与えたのはうれしいね」と喜雄さん。楽器を寄贈した子どもが超メジャーなプロミュージシャンになって自ら財団を設立したり、だいぶ大人になってから来日して共演を果たすこともあった。



「NO GUNS, NO DRUGS」の看板
(ニューオリンズの小学校)

ゼロからプラスに持っていくのは音楽の力

2005年にハリケーン・カトリーナがニューオリンズを襲った際も、WJFはいち早く支援を呼びかけるメッセージを発表し、日本で最初の支援コンサートを開催。WJFに寄せられた義援金は数年間で1300万円にのぼり、寄贈された楽器とともに、ニューオリンズの子どもやミュージシャンの支援に充てられた。「スラムで暮らすタフな青年も、ピカピカのテナーサクソを受け取ると隠れてしまった。物陰で泣いていた」というような逸話は数知れず。

その6年後に起きた東日本大震災。ニューオリンズの人々が「今度は自分たちが恩返しする番だ」とく日本のサッチモ>外山さんを通じて東北を支援してくれた。被災した宮城県気仙沼市の「スウィングドルフィンズ(気仙沼ジュニアジャズオーケストラ)」の復活も、ティピティナ財団をはじめ

めとする米国からの支援で叶った。ニューオリンズの高校生が来日して東北の生徒との交流セッションも実現。居合わせた若い医師からは「私たちができるのはマイナスになった人たちをゼロまでもっていくこと。ゼロからプラスに持っていくのはあなた方、音楽の力ですね」と声をかけられた。

ニューオリンズの厳しい現実は変わりなく、支援した子どもが刑務所に入ったり射殺されてしまったりしたこともあった。しかし、複雑な事情や難しさも承知して見守り続けている。子どもたちに夢と希望を届ける活動は「ネバー・エンディング・ストーリー」だとWJFでは捉えているという。日本でも、都会での大きなコンサートではなく、ローカルで気楽に楽しめる学校への「ジャズの出前」などを思い描く。高齢者の音楽と健康も考えてみたい。戸棚いっぱい



寄贈楽器を手にするニューオリンズの生徒たち
(G.W. Carver High School Band, 2003年)

っぴいのジャズ創

世記の貴重な資料も形にしていきたい。ジャズを通して人々に希望と平和を願うサッチモの精神は、ジャズの音色のように時空を超えて巡っている。

**日本レイ・アームストロング協会
(ワンダフルワールド・ジャズ・ファンデーション WJF)**
所在地: 千葉県浦安市
設立年: 1994年
URL: <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>

昨年(2014=平成26年)12月16日、千葉・浦安市の外山さん宅を日本フィランソピー協会の機関誌「フィランソロピー」編集担当の若林朋子さんが取材に訪れ、喜雄・恵子夫妻をインタビューしてくれました(写真右)。

このほどその記事が同誌に掲載されました。この号は「特集 音楽が結ぶ人の心、人の力」に焦点を当てています。巻頭インタビューには、小曾根真さんの「生きているだけで素晴らしい」と音楽で伝えたい。次いで特別インタビュー「音楽には計り知れない力がある」などが掲載され、そして「元気な社会の架け橋」として、公益財団法人音楽の力による復興センター・東北、ローム株式会社…と



ともに我々の日本レイ・アームストロング協会が、このように紹介されました。

もうみなさんも、お読みになって感じていただけたと思いますが、まさに WJF20周年にふさわしい同誌の企画で、それほどこれほど簡潔にステキにまとめて下さった記事に触れて、この取材にお邪魔した私にとっても感動的なものでした。そこで同協会にこの記事の会報への転載をお願いした次第です。もちろん快く OK をいただき、転載させていただきました。

ただし、同誌と会報との違いもあり、レイアウトはかなり異なりますが、記事内容や見出しには、いっさい手を加えていません。ご了承下さい。

(小泉良夫)

数え切れないイベント続き！まさに多彩、多忙な1年を振り返る

華やかに、賑やかに、豪華で楽しく…WJFクリスマスパーティー モダンジャズ・サクスのベテラン奏者、中村誠一さんの参加が光る

Merry Christmas everybody！ WJF恒例のクリスマスパーティーが、昨年も天皇誕生日の12月23日、千葉・浦安市のオリエンタルホテル東京ベイB1Fの「HUB新浦安店」で開催された。今年も開場前の正午過ぎから会員、WJFを支えているVIP、「サッチモの旅」同窓生のみなさんらが次々と集まってくる。

午後零時半開場。スタッフらも交えて会場は125人で埋め尽くされる。開場と共にドリンク飲み放題がスタートし、久々に再会したジャズ仲間との歓談が熱を帯びる。午後1時、お馴染みの山口義憲さん(会報「ワンダフルワールド通信」編集長)の司会(写真下左)で

開演。外山喜雄・恵子夫妻がステージに上ったの挨拶に次いで2014年WJF1年間の活

動報告(写真上中央)…会報83号ともども会場に配られていたが、A3の用紙にその内容がびっしり！そう、みなさんのご協力もあってそれほど活発に展開されたのです。主だったものだけでもご紹介させていただきます。

イベント盛りだくさんだった2014年 テレビや新聞、雑誌にも取り上げられ

①ユネスコ国際ジャズデイに参加しオープニングファンファーレ担当、日米被災地ジャズ交流報告 ②横濱ジャズプロムナード被災地支援イベント参加、NHKでも放映 ③ジャズ評論家、瀬川昌久さんの卒寿記念「Jazz I Love」参加 ④シャノン・パウエル率いる「ニューオリンズ・トラディショナル・オールスターズ」と全国12都市を回る ⑤「サッチモの旅」でニューオリンズ・ジャズ博物館復興にみなさんからの寄付金1万ドルを寄贈 ⑦仙台・定禅寺ストリート・ジャズフェスティバル復興支援ステージに出演 ⑧第34回サッチモ祭開催 ⑨三菱自動車東日本大震災チャリティーライブ出演…夫妻の出演コンサートは他にも多数続

き、WJFの活動を紹介…新聞、テレビにもしばしば取り上げられ、雑誌のインタビューも続いた。「サッチモの旅」での活動などは、報告が多すぎて会報82、83号と2回に分

けざるをえなかったほど。

次いで WJF「名誉会長」中村宏さん(医学博士、ジャズ評論家)の乾杯の音頭で食事とセインツの演奏も始まる(写真下段)。

今年は特にモダンジャズ界を代表するベテラン・サクスの奏者、中村誠一さん(写真下右の中央)がセインツに加わって、ソプラノ

サクスのシドニー・ベシエ・ファンタジーやら「プティット・フルール(小さい

花)」などが演奏され、参加者の目と耳をステージに引きつけた。モダンの名曲「モーニン」も素晴らしかった。もちろんデキシー・ムードいっぱい「バーボン・ストリート・パレード」が、参加者のみなさんのセカンドラインをともなって会場を巡り、ジャズの故郷へと誘う。

セインツは、外山喜雄(tp,vo)・恵子(p,bj)、鈴木孝二(cl)、粉川忠範(tb)、藤崎羊一(b)、サバオ渡辺(ds)のみなさん。音楽評論家の瀬川昌久さん(日本ポピュラー音楽協会専務理事)も元気に登場、サッチモを語る。

大いに盛り上がったところでお待たせの「飛び入りコーナー」。演奏順に①鈴木芳郎(tp=会員)、栗生清隆(ds)、樋口加鶴男(b=会員)、山口義憲(bj=理事)、多田由美子(vo)のみなさんによる「オール・オブ・ミー」…山口さん、この日ばかりは恵子さんのバンジョーを手にして得意満面！②石井修さん(vo=会員)「アイム・シューティング・ハイ」③森忠彦さん(vo=会員)「イツ・ア・シン・トゥ・テ



仲間が集い、飲んで食べて、おしゃべりもデキシーに乗って…



ル・ア・ライ」…森さんはニューオリンズへの寄贈楽器搬送

イズニーファン」から執筆者の香川光彦さんを通してミニバ

で初期のころから日本通運とともにご協力下さっている ④中山邦夫さん(vo=会員)「ブルース・メドレー」。

⑤特別ゲストの石井一さん(vo)「オール・オブ・ミー」…石井さんはもうご紹介するまでもなく、衆・参議院議員、国土庁長官、自治大臣、国家公安委員会委員長など(あとはもうとても書ききれません!)を歴任。特にお父様がレコード会社社長をしておられた関係でジャズにも造詣が深く、サクソも演奏される。日本音楽家協会の会長もしておられた。去年は「サッチモの旅」にも同行され、大いに話題を提供していただいた(会報82, 83号に詳報)。この日の石井さん、「私は歌よりも、演説の方が上手いのですが…」などと謙遜されていたが、「オール・オブ・ミー」を英語と日本語で熱唱、みなさんあっけにとられていましたね。

この飛び入りコーナーでは毎年、セインツが応援に出てバックを努めるものですから、どなたも一度出たら病みつきになるのでしょうか。カラオケとは雲泥の差!ですから。

あちこちからプレゼントが届けられ… 抽選会、じゃんけん大会は景品多数

ここで例年のように会員、水越有造さんからの差し入れで「サッチモの金太郎飴」が全員に配られる。いつも段ボールにいっぱいいただいており、後々もあちこちで利用させていただいている。そうそう会場に出されたデザートのリゴは「ジャズの街」宇都宮の会員、関口美夫からどさっ!と送られてきたもので助っ人も交え外山家で皮むき。

このあとの抽選会やじゃんけん大会の景品も会員、奥山康夫さんからディズニーカレンダーなどディズニーグッズ、外山さんとセインツの連載記事が掲載されている講談社の「デ



ッグ、中村宏さんからジャズ誌「ダウンビート」の T シャツ、水森亜土さんからクリアファイル(WJFのロゴマーク制作者でジャズ絵画などの大家、久保幸造さんのポストカード入り)、外山家からもDVD、CD、本「はばたけ、ルイ!」(若林千鶴訳)、「おはなし音楽会」(CD2枚付き) = このCDのナレーションを担当されている松川展子さんも顔を見せていた = など、プレゼント多数。お土産やプレゼントなしの方はおそらく皆無だったでしょう。

終盤の演奏に入る。サンタ衣装に着替えたセインツによるクリスマスソングが次々と登場し、「ホワイト・クリスマス」「ジングルベル」はみなさんも大合唱。「赤鼻のトナカイ」は藤崎さんの十八番。最後は「セカンドライン」でまたまた傘を手にして参加者がセインツに続いて会場を巡る。

中締めは、佐藤修さん(ポニーキャニオン社長や日本レコード協会会長など歴任)と磯野博子さん(ジャズ評論家・故いソノテルフ夫人)。

大爆笑! 佐藤修さんの“漫談風?” 中締め 磯野博子さんも加わって3本締めでお開き

3本締めの前に、佐藤さんがひと言…いや、次々と漫談風にあれこれ飛び出し会場は笑いの渦(写真下)。やっと“結び”に入って「ちょっと言い方が難しいんですが…ここが“若くない方”の同窓会のようになっている(笑)。デキシーは楽しいし、サッチモは新しいものをどんどん取り入れていったんです。みなさんも、どうか若い方々を



連れてきて下さい。年寄りはいらないって言うんじゃないですよ(爆笑)…」で、やっと3本締め。フィナーレの「聖者の行進」となった。

出演者、スタッフ、助っ人のみなさんも本当にご苦労さまでした。今年もまたよろしく!

永谷さん、西松さん、新宿のみなさん、おめでとうございます！

あの新宿トラッドジャズフェスティバルが都の『東京商店街グランプリ』に輝く

東京都の主催で都内商店街の優れた取り組みやイベントを表彰する第10回の「商店街の部」で昨年11月13日、なんと、なんと！あの「新宿トラッドジャズフェスティバル」(写真右と昨年のチラシ)を開催している同実行委員会(新宿要通り共栄会・末広通り商店街が『東京商店街グランプリ』を獲得したのです。東京都産業労働局によると、同フェスティバルは全国的にも珍しい「トラッドジャズ」に特化し、幅広い世代の奏者と観客を国内外から多く集めているというのが授賞の趣旨。

昨年も11月15、16の両日、第14回目が開催されている。プログラムによると会場は26。札幌、新潟、群馬、山梨、四日市、大阪、兵庫など遠来のゲストバンドを含め、ざっと数えただけでもバンドやグループ数は250を超えている。紹介されているプロミュージシャンは148人。もちろん外山喜雄とデキシーセインツも出演した。また各メンバーがそれぞれ別のグループを組んでステージ上にもいる。WJFのサッチモ祭に出演しているバンドもほとんど全員出ている。

そうなんです。WJF賛助会員でサッチモ祭にも出演している「キヤナルストリートジャズバンド」のリーダーでテナーサクソ奏者でもある、あの永谷正嗣(ながや・まさつぐ)さんが、このフェスティバル発起人で、実行委員長の要職にあるんです。200



都の発表資料(インターネット)から



サッチモ祭で演奏する永谷さん=2012



膨大な数の“音楽人形”を前に永谷さん(左)と西松さん=2008年

8年秋、第8回を目前に控えたある日、外山夫妻と山口義憲さん、それに私(小泉)が新宿のお店を訪ね、11月発行の会報56号用の取材をさせて貰ったことがある。新宿に呑者家チェーンを展開し、お仲間が自由に演奏出来るライブハウス「居酒屋銅羅(どら)」を新宿3丁目を立ち上げている。

永谷さんは知る人ぞ知る“音楽人形”の収集家で、ニューオリンズはもとより世界中の人形を集め、当時、「ほんの一部ですが…」と云って、三重県のホテルがつくった「音楽人形館」に5000体を寄贈したこともあった。

もうお一人、WJFの発足以来の賛助会員でサッチモの旅でも御一緒したことがある西松實さん(「新宿ヴォーカルの会」会長)と絶妙のコンビを組んで「新宿トラッドジャズフェスティバル」を運営されている。

そんなこともあって、この“グランプリ受賞”の報に外山夫妻もびっくり。そして、おめでとうございます！

昭島ジャズ・ライブ50回記念 NEW YEAR コンサート

JR青梅線昭島駅のすぐ近くにある立派な昭島市民会館(KOTORI ホール)で1月31日、「ジャズ・ライブ50回記念 NEW YEAR コンサート」が開催され、外山喜雄とデキシーセインツまたまた登場。今度は「サッチモ祭」でも共演した水森亜土&ローズルーム・ダンサーズもエレガントに加わり、1000人近いお客さんを喜ばせた(写真右)。もちろんデキシーの名曲は盛大な拍手を呼ぶ。

司会というか“おしゃべり”はタモリこと森田一義とバードマン幸田コンビ。同じ早稲田大学の先輩後輩の間柄で、新宿のジャズスポット『J』の同じ経営者仲間。第1部のセイ



ンツ演奏の合間にも外山さんら出演者につっこみ質問をあげせ、笑いを誘う。

第2部は、いま売り出し中の若手女性津軽三味線デュオ『輝&輝』。民謡からジャズナンバーまで多彩な演奏を披露すると、めったに聴けない三味線の音色だけに聴衆はうっとり。盛大な拍手を受けて微笑んでいたが、タモリとのやり取りには緊張でコチコチ。

続いて第3部は、早稲田大学ハイソエティ・オーケストラをバックに世界を舞台に活躍するジャズ・バイオリニスト、寺井尚子。独自の表情豊かな演奏スタイルで観客を魅了する。ハイソは今年で結成60年を迎える学生バンド

で、名門中の名門でもある。

バラエティーに富んだ盛りたくさんの企画構成で、この日もいつものように余韻を楽しみながら冬空のもと、家路に向った。

(文・奥村清文、写真・相馬威直)

＜「外山喜雄とデクシーセインツ」と旅するディズニーとジャズの世界＞
講談社発行の「ディズニー・ファン」が3ヵ月連続の大特集
富田勲さん、手塚治虫さんも掲載された「ディズニー・アカデミー」の世界

私たちWJFとも親交があり、外山夫妻の活動にも初期のころから注目していたサウンドデザイナー/プロデューサーの香川光彦さんが、外山夫妻を徹底インタビュー、講談社の月刊誌「ディズニー・ファン」(写真)に2～4月と3ヵ月にわたる素晴らしい特集記事を掲載してくれた。長文の“大作”なので、とてもそのすべてを掲載させていただくわけにはいかないが、この会報を借りて外山夫妻からその概要を伝えてもらうことにした。実物は書店でお求め下さいね。(外山喜雄・恵子)

記事は「ディズニー・アカデミー」のなかの＜「外山喜雄とデクシーセインツ」と旅するディズニーとジャズの世界＞。

いずれも盛り沢山で、＜2月号 Part1＞は、◇東京ディズニーランドのタイムスリップ ◇短編アニメーションとジャズ ◇短編アニメーションとジャズ ◇アニメーターたちによるディズニーランド・ジャズバンド ◇東京ディズニーランドとジャズ

＜3月号 Part2＞は、◇ウォルト・ディズニーとジャズ ◇ジャズ発祥の地ニューオーリンズ ◇アメリカ「古典ジャズ」の誕生 ◇外山喜雄/恵子夫妻、ニューオーリンズへ

＜4月号 Part3＞は、◇ルイ・アームストロングとニューオーリンズ ◇パーリーバンドとロイヤルストリート・シックス ◇これからの外山夫妻とデクシーランド…など。

**サッチモとディズニー…アメリカを代表する巨匠
この2人に50年仕えた外山夫妻の全容を活写**

サッチモとディズニー…アメリカを代表する2人の巨人に仕えて、50年！ 雑誌「ディズニー・ファン」で連載のお知らせを受けた。＜「外山喜雄とデクシーセインツ」と旅するディズニーとジャズの世界＞ なんと3ヵ月連載という。

私たちは、1963年、64年と来日したルイ・アームストロングに憧れ、1968年ジャズとサッチモの故郷ニューオーリンズに移住、ジャズ武者修行をしました。5年間のニューオーリンズ修業…サッチモが育ったジャズの街のスラムで、サッチモの隣人たちから学んだジャズ体験は、私たちの活動と演奏のルーツとなっています。

そして1983年、日本に開園した東京ディズニーランドに出演する機会が訪れ、2006年まで23年間、ファンタジーランドや、アドベンチャーランドのニューオーリンズ広場で演奏…現在も、イクスピアリでの演奏が人気を博しています！ 私たちは、このアメリカを代表する二人の巨人に50年仕えることが出来た…これを大変誇りに感じているのです。

**東京ディズニーランドの伝説的存在？
開演から23年間も演奏活動を続け…**

現在では、東京ディズニーランド開園当時のことを知る人々も少なくなり、また、当時からずっと演奏活動を続けている稀有な存在として、私たちは、ちょっと、TDLの伝説的存在(笑)みたいな扱いで、ディズニー・ファンから、インタビュー等受けていました。

ディズニー・ファンでは、アカデミックな情報を伝えるコーナーができていてディズニー・アカデミーというページになっています。

ここでは、ディズニーシーのアクアフィアの音楽を担当、また、イツ・ア・スモールワールドの日本の場面…1960年代に制作を担当して話題になったシンセサイザーの富田勲さん。また、手塚治虫のジャングル大帝、リボンの騎士等の音楽なども、特集されています。その他、ディズニー音楽と作曲家たち、ディズニーの伝説アニメーター・ナイン・オールドメンとフランク・トーマス、天才アニメーターたちの思い出…等々もテーマとなりました。

今回は、私たちとディズニー、そしてジャズを3ページ特集という事で、各号3ページ3ヵ月間という、びっくりの大特集となりました！

ライターは私たちと長年の友人、サウンドデザイナー/プロデューサーの香川光彦さん。東京ディズニーランドでモーグ・シンセサイザーによるエレクトリック・ミュージックのBGM取材をしていたところ、偶然、カフェ・オーリンズでライブをおこなっていた外山喜雄とデクシーセインツと出会ったのです。以来、私たちの音楽活動に共感し、サポートしてくれています。昨年のWJFクリスマスパーティーには、講談社からのプレゼント、ミッキーとミニニーがデザインされた可愛いディズニーのミニバッグ(24個)を持参、ステージで「ディズニー・ファン」連載をPRして下さいました(写真)。



新春恒例「デキシーランド・ジャズ・ジャンボリー」

いまだ正月気分が漂う1月10日、東京・日比谷公会堂で日本を代表するデキシー5バンドが出演しての演奏会、第7回「新春！デキシーランド・ジャズ・ジャンボリー」が、今年も肌寒さを吹き飛ばす勢いで力強く、大入りの観客を迎えて開催された。主催：日本ポピュラー音楽協会、監修：瀬川昌久、司会：蓮見のりこ。

5バンドは出演順に、
①有馬靖彦とデキシージャイブ(since 1974) ②デキシーキャッスル(since 1975) ③中川喜弘とデキシーサミツ with 中川英二郎(since 1975) ④外山喜雄とデキシーセイントゥ(since 1975) ⑤藪田憲一とデキシーキングス(since 1960)。結成年を見ると、歴史の重みを感じさせる。



オープニングは午後3時、お正月にふさわしい日本の名歌『一月一日』で始まる。♪年の初めのためしとして 終わりなき世のめでたさを…なんとボーカルは外山さん。歌い上げて、幕が上がる。続いて、出演者全員が勢ぞろいして今年が明るい一年になる事を祈っての『世界は日の出を待っている』(写真中央下段)。

デキシージャイブに始まって、今年の各バンド共通の課題曲『ダイナ』が、それぞれ工夫を凝らし、特色を活かした編曲で熱演し、観客を大いに酔わせる。デキシーセイントゥは、外山喜雄(tp,vo)・恵子(p,bj)、鈴木孝二(cl,as)、広津誠(cl,ts)、粉川忠範(tb)、藤崎羊一(b)、サバオ渡辺(ds)の面々(同上段)で、『ダイナ』はベースの藤崎さんがディック・ミネさながらの渋いボーカルを披露した。観客から大拍手。

デキシーキングスの演奏には、この会場となった日比谷公会堂と同一年、昭和4年生まれというスペシャルストの北村英治さん(cl)が加わり『シャイン』など2曲をしつとりと聴かせる。まだまだ若々しい素晴らしい演奏に心を打たれる。

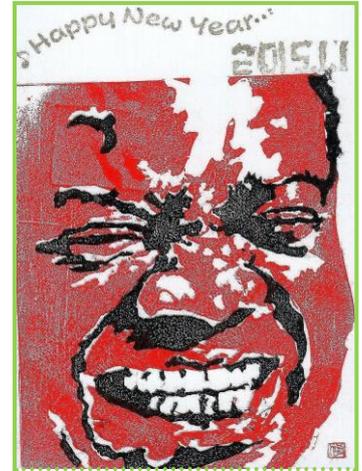
5バンドの演奏が終わって、今度は中川喜弘さんの指揮で出演者全員によるオーケストラ。まさにデキシーランド・ジャズ・ジャンボリー・オールスターズで『星条旗よ永遠なれ』、『バラ色の人生』など5曲を演奏。特に『シング・シング・シング』では、各バンドの5人のドラマーがそれぞれ延々と力強く演奏し、迫力抜群。中川さん曰く「こんな凄いフルバンドはありません」。フィナーレは、おなじみの『聖者の行進』。出演者が会場を回りながら、またの再会を約し、別れを惜しむ。

(文・奥村清文、写真・相馬威宣)

ご寄付と嬉しいお手紙

ありがとうございます

◆井上和弘様 (大阪市) 30,000円
(前回到続き、再びご寄付いただきました。ありがとうございます)



今年も素晴らしかった佐藤修さんのサッチモ賀状

募集中

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい！！

また皆様のお知り合いの方々に
ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

＝WJF年会費＝

- 一般会員(General Membership) ¥6,000
- 学生会員(Student Membership) ¥3,000
- 賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンドフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通:5175119“ワンドフルワールド”

お問い合わせは:WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Google で

<検索>ルイ・アームストロング

<http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>

サッチモを敬愛し、ジャズが好きで、ニューオリンズに愛着のある方々によびかけて設立された日本ルイ・アームストロング協会は20周年を迎えることができました。▼20年前のニューオリンズのスラム街はサッチモが少年だったころと状況は基本的に変わっておらず、小学校の入口には「銃持ち込み禁止」のステッカーが貼られ、子供たちの麻薬禍も報道されておりました。▼ニューオリンズで青春ジャズ武者修行を行い、同市名誉市民称号を受けた外山夫妻は、アメリカに、ニューオリンズに恩返しをこの運動を発案、協会を立ち上げて運動をスタートしたのが20年前だったのですね。▼「銃に代えて楽器を！」のスローガンは米国でも受け入れられ、子供たちへの音楽プログラムがニューオリンズで、米全国各地で展開されるようになりました。▼サー・チャールズ・トンプソンさんのピアノを例会で、目の当たりに見聞きできたという夢のような出来事もありました。芸術祭に参加のコンサートもありましたし、ジャズ・クリスマスの楽しさも格別です。最近、サッチモのホット5&7をよく聴くようになりました。(山)

編集長から